**5月の季語 30の【一覧】と例句**5月に入ると爽やかな天気の日も多く、五月晴れの空は見ていてとても気持ちがいいものです。

その空を風に吹かれて泳ぐ鯉のぼり、日の光を受けて輝く若葉など、目にする風物も清々しさに満ちています。

このページでは、そのような季節感に満ちた「5月の季語」といえるものを集めて、それぞれの例句とともに並べました。5月ならではの雰囲気が感じられるものばかりですので、是非チェックしてみて下さい。

**袷 / あわせ**

【例句】旅したき　思ひそゞろに　初袷　【作者】高橋淡路女(たかはし あわじじょ)

【補足】袷とは、裏地がある着物のことをいいます。

**柏餅 / かしわもち**

【例句】柏餅　古葉を出づる　白さかな　【作者】渡辺水巴(わたなべ すいは)

【補足】柏餅には、地域によって様々な呼び方があります。

* かしわもち　しばもち　かたらもち　いばらもち　おまき　だんご　かからだご

**薫風 / くんぷう**

【例句】舞殿や　薫風昼の　楽起る　【作者】河東碧梧桐(かわひがし へきごとう)

**鯉幟 / こいのぼり**

【例句】鯉幟　きそふ緑の　ありてよし　【作者】後藤夜半(ごとう やはん)

【補足】鯉幟が飾られるようになったのは、江戸時代になってからのことでした。

**早乙女 / さおとめ**

【例句】早乙女の　夕べの水に　ちらばりて　【作者】高野素十(たかの すじゅう)

【補足】早乙女とは、田に苗を植える女性のことです

**五月 / さつき**

【例句】噴水の　玉とびちがふ　五月かな

【作者】中村汀女(なかむら ていじょ)

【補足】旧暦・5月の和名は「皐月(さつき)」と表記されることもあります。

**五月晴 / さつきばれ**

【例句】夕顔の　苗売る声や　五月晴　【作者】正岡子規(まさおか しき)

【補足】五月晴れは、旧暦の時代には「梅雨の時期の晴れ間」のことを意味していました。

**五月富士 / さつきふじ**

【例句】目にかかる　時やことさら　五月富士　【作者】松尾芭蕉(まつお ばしょう)

**菖蒲 / しょうぶ**

【例句】小障子に　菖蒲の影や　夕月夜【作者】正岡子規

**菖蒲湯 / しょうぶゆ**

【例句】菖蒲湯を　出てかんばしき　女かな　【作者】日野草城(ひの そうじょう)

【補足】端午の節句に菖蒲湯に入る習慣が広まったのも江戸時代になってからのことです。

**新樹 / しんじゅ**

【例句】借りてさす　傘美しき　新樹かな　【作者】阿部みどり女(あべ みどりじょ)

**新茶 / しんちゃ**

【例句】わが碗に　をさめししづく　新茶くむ　【作者】皆吉爽雨(みなよし そうう)

**セル**

【例句】セルの肩　月のひかりに　こたへけり　【作者】久保田万太郎(くぼた まんたろう)【補足】セルは薄手の毛織物の名前です。

**田植え / たうえ**

【例句】しばらくは　荒雨しぶく　田植笠　【作者】西島麦南(にしじま ばくなん)

**筍飯 / たけのこめし**

【例句】松風に　筍飯を　さましけり　【作者】長谷川かな女(はせがわ かなじょ)

**端午 / たんご**

【例句】丈夫なる　泣き声たてて　初端午　【作者】阿部みどり女

【補足】端午の「端」は始まり、「午」は十二支の午(うま)の日という意味で、本来「端午」は月の始めの午の日のことを意味していました。

**粽 / ちまき**

【例句】恋しらぬ　女の粽　不形なり　【作者】上島鬼貫(うえじま おにつら)

【補足】不形(ぶなり)とは、形が悪いことを表現する言葉です。

**梅雨迎ふ / つゆむかう**

【例句】味噌倉の　鼠と共に　梅雨迎ふ　【作者】鈴木真砂女(すずき まさごじょ)

**夏めく**

【例句】夏めくや　庭土昼の　日をはじき　【作者】星野立子(ほしの たつこ)

**薄暑 / はくしょ**

【例句】急ぎきて　薄暑を感じ　ゐたりけり　【作者】稲畑汀子(いなはた ていこ)

【補足】薄暑とは、初夏の頃に少し感じるくらいの暑さのことです。

**葉桜 / はざくら**

【例句】葉ざくらに　人こそしらね　月繊そる　【作者】飯田蛇笏(いいだ だこつ)

【補足】葉桜とは、花が散って若葉が出始める頃から新緑で覆われる頃までの桜の木の様子を表現する言葉です。「繊そる」の読み方は「ほそる」です、

**八十八夜 / はちじゅうはちや**

【例句】霜害を　恐れ八十　八夜待つ　【作者】高浜虚子(たかはま きょし)

【補足】八十八夜は雑節(ざっせつ)の一つで、「立春から数えて88日目の夜」のことをいいます。

**初鰹 / はつがつお**

【例句】みどり葉を　敷いて楚々たり　初鰹　【作者】三橋鷹女(みつはし たかじょ)

**初夏 / はつなつ**

【例句】初夏の　山立ちめぐり　四方に風　【作者】水原秋桜子(みずはら しゅうおうし)

【補足】「四方」の読み方は「よも」です。

**万緑 / ばんりょく**

【例句】万緑を　一蝶浅く　めぐりゐる　【作者】阿部みどり女

**吹流し / ふきながし**

【例句】吹流し　五月の風を　蹴りに蹴る　【作者】山口誓子

**繭 / まゆ**

【例句】夏痩も　せずに繭煮る　女かな　【作者】尾崎紅葉(おざき こうよう)

【補足】繭から糸を繰り取る準備として、繭を煮ることを煮繭(しゃけん)といいます。

**武者人形 / むしゃにんぎょう**

【例句】武者人形　飾りし床の　大きさよ　【作者】稲畑汀子

**立夏 / りっか**

【例句】雨あしの　立夏をあらき　拓地かな　【作者】飯田蛇笏

【補足】立夏は、一年を24等分したものに季節の名前を付けた二十四節気の一つです。５月６日ころ

**若葉 / わかば**

【例句】をちこちに　滝の音聞く　若葉かな　【作者】与謝蕪村

現代の暦(新暦)の 5月の行事や風物などが詠み込まれている句を集めました。俳句の季語の季節感は旧暦によるものであり、ここに集めた句の季語は「夏」のものです。

**袷着て　ほのかに恋し　古人の句**

【季語】袷

【作者】原 石鼎(はら せきてい)

【補足】 袷(あわせ)とは裏地がある着物のことをいいます。反対に、裏地がないものは単衣(ひとえ)です。

**うつすらと　からかみ青き　五月かな**

【季語】五月

【作者】山口誓子(やまぐち せいし)

【補足】からかみ(唐紙)は襖(ふすま)に貼る紙のことで、産地から京から紙と江戸から紙に分類できます。

**大江戸や　犬もありつく　初鰹**

【季語】初鰹

【作者】小林一茶(こばやし いっさ)

【補足】初鰹(はつがつお)を詠んだものとしては、次の山口素堂(やまぐち そどう)の句が有名ですね。

目には青葉　山ほととぎす　初鰹

**折りし皮　ひとりで開く　柏餅**

【季語】柏餅

【作者】山口誓子

**五月来ぬ　心ひらけし　五月来ぬ**

【季語】五月

【作者】星野立子(ほしの たつこ)

**菖蒲湯や　眉落としたく　思ひもす**

【季語】菖蒲湯

【作者】高橋淡路女(たかはし あわじじょ)

【補足】端午の節句(5月5日)に菖蒲湯(しょうぶゆ)に入る習慣が一般の民衆に広まったのは江戸時代になってからのことです。

**新樹の戸　あけるを待つに　夜のあらし**

【季語】新樹

【作者】篠田悌二郎(しのだ ていじろう)

**新緑に　いよいよ古き　伽藍かな**

【季語】新緑

【作者】日野草城(ひの そうじょう)

【補足】伽藍(がらん)とは寺院の建物を指していう言葉で、サンスクリット語の saṃghārāma(＝僧が集まって修行をする清浄で閑静な場所)を音写した「僧伽藍摩(そうぎゃらんま)」が略されたものです。

**雀らも　海かけて飛べ　吹流し**

【季語】吹流し

【作者】石田波郷(いしだ はきょう)

【補足】鯉幟(こいのぼり)は鯉の吹き流し、皐幟(さつきのぼり)といわれることもあります。

**セルを着て　うつくしき月　頭上にす**

【季語】セル

【作者】大野林火(おおの りんか)

【補足】セルは薄手の毛織物で、着物の生地として用いられます。着心地は涼やかです。

**旅立の　前の養ひ　新茶くむ**

【季語】新茶

【作者】皆吉爽雨(みなよし そうう)

**玉垣や　花にもまさる　べに若葉**

【季語】若葉

【作者】阿波野青畝(あわの せいほ)

**猫の子の　ほどく手つきや　笹粽**

【季語】粽

【作者】小林一茶

【補足】粽(ちまき)は平安時代の頃に中国から日本へ伝わったものです。

**薄暑来ぬ　人美しく　装へば**

【季語】薄暑

【作者】星野立子

【補足】薄暑(はくしょ)とは、初夏のころに少し感じるくらいの暑さをいいます。

**葉ざくらの　ひと木淋しや　堂の前**

【季語】葉ざくら

【作者】炭 太祇(たん たいぎ)

【補足】葉桜(はざくら)とは、花が散って若葉が出始める頃から新緑で覆われる頃までの桜の木の様子をいいます。

**葉桜や　白粉つけて　さびしけれ**

【季語】葉桜

【作者】山口青邨(やまぐち せいそん)

**孫六が　太刀の銘きる　端午かな**

【季語】端午

【作者】田川鳳朗(たがわ ほうろう)

【補足】孫六兼元(まごろく かねもと)は室町時代から続く**刀工**(とうこう＝日本刀、刀剣をつくる職人)です。

**まゆひとつ　仏のひざに　作るなり**

【季語】まゆ

【作者】小林一茶

**湯上りの　尻にべつたり　菖蒲哉**

【季語】菖蒲

【作者】小林一茶

**夕月や　あぎと連ねて　鯉幟**

【季語】鯉幟

【作者】三橋鷹女(みつはし たかじょ)

【補足】「あぎと」とは、あご、魚のエラのことです。